自分は、我流に読み取るバカ（？）かも

最近のベストセラーの養老孟司著の「バカの壁」を読んだ。著者は脳の機能に詳しい学者で、かなり以前にＮＨＫＴＶ番組で悠木千帆とのペアで、シリーズで脳の働きについて分かり易く解説していたのが印象に残っている。ベストセラーだけに、読んだ方も多いと思う。世界情勢、社会情勢、人間の行動、等々を、脳の面、しかも、脳への入力、出力の側面から、y ＝ ax と表し、「大雑把に」解説しようというものである。

知識（情報）として解ることと、実感として解ることの違いに触れている。つまり、a の係数が人により異なるのは当然との見解のようである。（読んだ方で、「そういう内容でないよ」という方もいるかもしれない。つまり、「大雑把」に云えば、僕とその方とは a が異なるので、同じ書物を読んでも（入力）、読みとること（出力）は異なることは、読む人の実感（a）に異なりがあるので、あり得るということのよう。）

a は人それぞれに異なることであり、異なりを認めた上で、お互いが「人間であればこうだろう」という普遍的な思想をもとうでないかという呼びかけの書物と、僕なりに理解した。

お互いに人間同士、いつか、どこかで輔け合えるものと、僕は信じたい。僕は福祉に係わる人と接することが多いが、しばしば、行政がどうの、国がどうの、社会がどうの、という人が多い。そうした時、「行政等を喧嘩相手のままにしないで、理解者に育てる方策を思考しては！」と僕はよくいうが、「行政等の実際に対応する窓口の担当者も、人間だ！」ということ。目の前の人間に解ってもらえると信じずして、何を話し、社会に理解を求めようとするのかということ。互いに人間であり、異なりのあることはあり得るという認識の上で、互いに異なりはあるが、共通する問題をお互いの立場で輔け合いながら、「共に人間として生きるとは、どういうことか」を、追い求める過程を尊重する社会でありたい、と常々思っている。

この本の中で引用されているフランクル（アウシュビッツの強制収容所の中で書いた「夜と霧」の著者）の、末期ガン患者の生きる意味を、「その人が運命を知った上で取る態度によって、周囲の他人が力づけられるという意味がある」という言葉の意味を、今僕はじっくり思索してみたい衝動に駆られている。

（2003 年 08 月 31 日　記）